

初対面二者間の会話におけるスピーチレベル管理について

—相手言語接触場面と第三者言語接触場面における

中国人上級学習者を比較して*

陳 新

On the Conversation Level between the Unacquainted:

A Comparison of Situations Involving Partner and Third-Party Language Contact by Chinese Learners of Advanced Japanese

CHEN, Xin

日語文末文体有敬体和简体之分，根据谈话对象及场面的不同，使用或者转换相对应的文末文体。本文作为阐明日语学习者的有关文末文体转换现象的实证研究，利用会话分析手段，采用定量和定性相结合的方法，调查了在“初次见面”自然谈话中，中国学习者在不同语境下的文末文体使用情况。具体以11名高级日语学习者（CNS）为研究对象，设定了两个场面：一个是CNS与日语母语者为对象的“对方语言接触场面”（以下为“对方言语场面”）；另一个是CNS与非日语母语者（韩国日语学习者、德国日语学习者、马来西亚日语学习者）为对象的“第三语言接触场面”（以下为“第三言语场面”）。

采用SPSS进行数据分析，调查结果如下：“初次见面”谈话中，无论对方是否为日语母语者，CNS都会按照日语语言规则，选择使用敬体作为谈话的基调文体。但当谈话对象是非日语母语者即第三言语场面时，CNS更倾向于往简体转换。另外，当谈话对象是日语母语者即对方言语场面时，CNS倾向于在有关涉及“说话者即自身领域”的谈话中往简体转换；与此相反，当谈话对方是非日语母语者即第三言语场面时，CNS倾向于在有关涉及“听话者即对方领域”的谈话中往简体转换。也就是说，CNS对日语母语者则优先考虑日语的“待遇表现”的交际策略，而对非母语者即在语言文化背景多元化语境下则优先考虑“缩短心理距离，注重信息建构”的交际策略，这些倾向反映了日语学者有关文末文体转换的使用受到了“谈话对象是否为日语母语者”这一语言外因素的影响，具有独特性、多样性、动态性特征。

* 本研究は中国中原工学院青年中堅教師奨励費の助成を受けたものです；本研究は2021年度中国河南省高等学校重点研究課題（番号：21B630017）の研究成果の一部である（本文“受中原工学院青年骨干教师资助”（2020年10月-2023年9月）；本文は2021年度河南省高等学校重点科研项目（编号：21B630017）の阶段性成果）。

1. はじめに

日本語は「デスマス形」(丁寧体)と「非デスマス形」(普通体)というスピーチレベルが文末形式に組み込まれている言語である。日本語母語話者は実際の会話において、場面や相手に応じて基調としてデスマス形か非デスマス形かという「基本的スピーチレベル」を設定し、また、相手との心的距離の変化や談話の展開などに応じて、デスマス形から非デスマス形へ、非デスマス形からデスマス形へという「スピーチレベル・シフト」を巧みにを行いながら円滑なコミュニケーションを図っているとされている(三牧2013など)。このような談話におけるスピーチレベルに関するさまざまな調節を、本稿では、三牧(2013)に従い、包括的に「スピーチレベル管理」と称することにする。一方、学習者のスピーチレベル・シフトに関しては、母語話者には見られない学習者特有の要因によってスピーチレベル・シフトをする現象があることも指摘されており、さらに、その特有の要因は、学習者の言語運用能力の不足を理由に結論づけられることが多かった(ボイクマン・森2018など)。しかし、陳・川口(2012)、赤羽(2014)、川口(2015)、陳(2019a、2019b)などの報告にあるように、言語習得を考える上で、話し相手が目標言語の母語話者か否かという要因が学習者内部に生じる日本語のバリエーションに影響を与える可能性は看過できないと考えられる。

そこで、本稿では、対話者が日本語母語話者であるか否かという違いが学習者のスピーチレベル管理にどのように影響するかを明らかにするために、日本語母語話者との相手言語接触場面(以下、「相手場面」)及び非母語話者同士の第三者言語接触場面(以下、「第三者場面」)¹という

1 ファン(2006: pp.127-128)では、「相手言語接触場面」は、「参加者のどちらかが相手の言語を用いてインターアクションを取る場面」、「第三者言語接触場面」は、「参加者の双方が自分の言語ではなく第三者の言語でインターアクションを取る場面」と定義されている。

二つの場面を取り上げ、比較分析を行うことにする。具体的に、中国人上級学習者²（CNS）11名を対象とし、それぞれの会話場面に「初対面」会話を設定して、CNSが会話相手や場面に応じてどのような基本的スピーチレベルを選択しているか、どのような状況でスピーチレベルをシフトさせるか、考察することにする。

2. 先行研究と研究課題

2.1 先行研究のまとめ

これまでの日本語学習者のスピーチレベル管理に関する研究では、日本語母語話者との相手場面を対象としたものが中心であり、これらの研究の多くは学習者の言語行動と母語話者のそれとの違いを分析している。例えば、学習者のスピーチレベル管理に関しては、母語話者と比べて目上に対する非デスマス形へのシフト（上仲1997）や非デスマス形の使用頻度（陳2004）が高いこと、また、学習者特有の決まり文句が固定化したことによるシフト現象（上仲2005）や日本語学習者の基本的スピーチレベルが不明確な状況（篠崎2012）が見られたことなどが報告されている。このように接触場面における学習者特有のスピーチレベル・シフトの様相が解明されつつあり、さらに、その特有の要因は、学習者の言語運用能力の不足を理由に結論づけられることが多かった（ボイクマン・森2018など）。

一方、近年、外国人の増加により、非母語話者同士の第三者場面におけるスピーチレベル管理に対しても目が向けられ始めている（陳・川口2012、高橋他2017、陳2019 a）。陳・川口（2012）は、中国人上級学習者（CNS）1名を対象とし、相手場面と第三者場面における「対友人」

² 調査対象者CNSと会話相手の日本語能力は、滞日期間（1年以上）、学習歴（800時間以上）、日本語能力試験（N1 / 1級）の資格によって上級と判定した。

会話と「初対面」会話において、CNSの文末のスピーチレベルがどのような選択基準によってシフトするかについて分析を行っている。その結果、両場面ともに、CNSは「日本語のルール」に従って「親疎」という相手との人間関係を考慮し、「対友人」会話には普通体を、「初対面」会話には丁寧体を基調として選択していること、「対友人」会話、「初対面」会話ともに、相手場面では丁寧体へシフトしやすいことが示された。高橋他（2017）は約1年間日本に滞在している知り合いまたは友人関係の学習者16名を対象に、第三者場面におけるスピーチレベル・シフトの様相について考察した。その結果、相手のスピーチレベルに合わせたシフトは相手場面で、親密性の強調を表すシフトは第三者場面で顕著に見られる学習者もいたという。陳（2019 a）は相手場面と第三者場面における「対友人」会話に注目し、親しい友人に対する中国人上級学習者（CNS）の文末のスピーチレベルがどのような選択基準によってシフトするかについて分析を行った。その結果、CNSは、相手場面では情報内容を持たず、ほとんど無意識に発せられる「あいづち」の場合に「デスマス形」へシフトする傾向があるのに対して、第三者場面では、「重要部分の明示・強調」という場面で用いられ、談話の展開を明確にするためにスピーチレベル・シフトを行う傾向があることが分かった。

このように、第三者場面におけるスピーチレベル管理に注目した研究は近年散見されるようになったが、相手場面を扱った研究と比べ、まだ少ないと言えるだろう。特に、「初対面」会話の第三者場面を扱った研究は管見の限り、陳・川口（2012）のみである。しかし、陳・川口（2012）では、調査協力者である非母語話者の性別や日本語能力などの属性が統一されていない。また、高橋他（2017）では、2者間の会話が中心であるが、3者間、4者間の会話も分析対象として採用されており、会話間の参加者人数が統制されていないという問題点がある。第三者場面におけるスピーチレ

ベル管理に関する考察には、調査協力者の社会関係、性別といった当該要素を統制した会話状況を設定する必要があると考えられる。

2.2 本研究の立場と研究課題

以上を踏まえて、本稿では「相手場面」と「第三者場面」における「初対面」会話に注目し、初対面の相手に対するCNSのスピーチレベル管理はどのような選択基準によってなされるかを明らかにする。そのために、以下の2点を研究課題として設定し、分析と考察を進める。

- ①「相手場面」と「第三者場面」における「初対面」会話は、それぞれ、どのような基本的スピーチレベルが選択されるか。
- ②「相手場面」と「第三者場面」における「初対面」会話は、それぞれ、どのような状況でスピーチレベル・シフトが行われるか。

3. 調査概要と分析方法

3.1 調査対象及び調査方法

本調査では、会話場面を初対面二者間会話に設定し、会話参加者の社会的属性を統制するために、全データの調査参加者を大学に所属する交換留学生、学部生と大学院生（すべて20代の女性³）とした。「初対面」における会話データは、事前に出身地、年齢などの相手に関する情報を一切与えず、自由な話題で20分間会話をするという状況で収録した。具体的には、中国人上級学習者（CNS）11名と初対面関係にある日本語母語話者（JNS）7名、韓国人上級学習者（KNS）3名、ドイツ人上級学習者（GNS）2名、マレーシア人上級学習者（MNS）1名、合計6名の日

³ 「性別」の要素がスピーチレベル管理に影響を与える（三牧2013）ため、また、筆者の所属している大学の留学生が男性よりも女性のほうがかなり多かったことから調査対象者を「女性」に統一した。

本語非母語話者との2場面14組による自由会話、合計280分の会話を収録した。調査時期は2016年5月～2017年12月までであった。表1に調査参加者のインフォーマント情報を、表2に場面別会話者の組み合わせを示す。

表1 調査参加者のインフォーマント情報

	日本語能力	国籍	母語	性別	年齢	滞日歴	日本語学習歴
CNS1	上級	中国	中国語	女	21	1年	3年2ヶ月
CNS2	上級	中国	中国語	女	21	1年	3年2ヶ月
CNS3	上級	中国	中国語	女	25	2年2ヶ月	5年7ヶ月
CNS4	上級	中国	中国語	女	23	1年8ヶ月	5年2ヶ月
CNS5	上級	中国	中国語	女	23	1年	4年
CNS6	上級	中国	中国語	女	27	3年	6年
CNS7	上級	中国	中国語	女	25	2年8ヶ月	6年1ヶ月
CNS8	上級	中国	中国語	女	25	3年	5年2ヶ月
CNS9	上級	中国	中国語	女	21	3年6ヶ月	3年8ヶ月
CNS10	上級	中国	中国語	女	24	1年7ヶ月	5年7ヶ月
CNS11	上級	中国	中国語	女	21	1年	2年4ヶ月
JNS1	母語話者	日本 (千葉県)	日本語	女	20		
JNS2	母語話者	日本 (群馬県)	日本語	女	20		
JNS3	母語話者	日本 (群馬県)	日本語	女	21		
JNS4	母語話者	日本 (茨城県)	日本語	女	22		
JNS5	母語話者	日本 (群馬県)	日本語	女	20		
JNS6	母語話者	日本 (岐阜県)	日本語	女	20		
JNS7	母語話者	日本 (千葉県)	日本語	女	20		
KNS1	上級	韓国	韓国語	女	21	7年	3年
KNS2	上級	韓国	韓国語	女	21	1年	8年
KNS3	上級	韓国	韓国語	女	21	1年	4年9ヶ月
GNS1	上級	ドイツ	ドイツ語	女	29	1年9ヶ月	3年
GNS2	上級	ドイツ	ドイツ語	女	22	2年	3年8ヶ月
MNS1	上級	マレーシア	マレーシア語	女	22	3年9ヶ月	4年6ヶ月

表2 場面別会話者の組み合わせ

相手場面	第三者場面
「CNS1-JNS1」場面	「CNS1-KNS1」場面
「CNS2-JNS2」場面	「CNS2-KNS2」場面
「CNS3-JNS3」場面	「CNS3-KNS3」場面
「CNS4-JNS4」場面	「CNS8-GNS1」場面
「CNS5-JNS5」場面	「CNS9-GNS2」場面
「CNS6-JNS6」場面	「CNS10-GNS2」場面
「CNS7-JNS7」場面	「CNS11-MNS1」場面

また、表2に示した14組の会話データを宇佐美（2006）の「改訂版：基本的な文字化の原則BTSJ」に従って文字化した。

3.2 本稿における「スピーチレベル」の分析方法

本稿では、文末のスピーチレベルを伊集院（2004）の一部を参考に、大きく「デスマス形（Polite-form：P）」、「非デスマス形（Non-Polite form：N）」、「中途終了型発話（No-Marker：NM）」の三種に分けることにした。「デスマス形（P）」は、言い切りのデスマス形や終助詞あるいは接続助詞が付いているデスマス形を含む。「非デスマス形（N）」は、言い切りの非デスマス形や終助詞あるいは接続助詞が付いている非デスマス形であり、名詞、副詞の一語文および名詞や形容動詞の語幹で終了している文を含む。「中途終了型発話（NM）」とは、述部まで言い切られていないにもかかわらず、意図した情報の伝達が終了している発話を表す。

また、林（2008）の「会話のストラテジーの中で、話者交替に最も強く結び付いているのが「あいづち」である」（p.17）という指摘に基づき、1発話を成す「あいづち」を分析対象にすることにした。日本語記述文

法研究会編（2009）に示されたあいづち表現の待遇の意味に従い、「はい、ええ、はあ、いいえ、いえ」をデスマス形（P）、「うん、おう、ああ、まあ、ううん、いや」を非デスマス形（N）として扱うことにする。以上の基準に基づき、発話ごとに文末のスピーチレベルをコーディングして集計した。

4. 調査結果及び考察

4.1 基本的スピーチレベルの選択及び選択基準

まず、両場面における「初対面」会話のCNSのスピーチレベルを表3-1に示す。

表3-1 両場面における「初対面」会話のスピーチレベル

	発話数 (%)			
	デスマス形	非デスマス形	中途終了型	合計
相手場面	741 (62.3)	271 (22.8)	178 (15.0)	1190 (100.0)
第三者場面	764 (56.9)	369 (27.5)	210 (15.6)	1343 (100.0)
合計	1505 (59.4)	640 (25.3)	388 (15.3)	2533 (100.0)

($\chi^2(2) = 8.787, p < .05$)

この結果について χ^2 検定を行ったところ、5%水準で有意差があった($\chi^2(2) = 8.787, p < .05$)ことから、「初対面」の場合、CNSのスピーチレベルの使用様相には相手が日本語母語話者であるか否かが影響することが把握された。

表3-1をみると、「初対面」の場合、相手場面であれ、第三者場面であれ、CNSの最も出現率の高いスピーチレベルはデスマス形で、相手場面では62.3%（741話）、第三者場面では56.9%（764話）を占めている。つまり、「初対面」会話の場合、相手場面と第三者場面のどちらにおい

でも、CNSは基本的スピーチレベルをデスマス形を基調として設定していることが分かる。

日本語の言語規範に従い、「初対面」会話の場合は、「疎-疎」の社会的関係があるので、デスマス形が基本的スピーチレベルとして設定されるのが一般的である。したがって、上記の結果から、「初対面」会話においては、基本的スピーチレベルの設定に当たって、CNSは、相手が日本語母語話者か非母語話者かにかかわらず、日本語の言語規範に従い、「疎」という社会的関係を考慮し、デスマス形を選択していることが分かる。

しかし、「初対面」の場合、CNSの基本的スピーチレベルの設定には相手が日本語母語話者か非母語話者かによる違いが見られないものの、デスマス形から非デスマス形へのスピーチレベル・シフトには差が見られた。表3-1と表3-2を見ると、デスマス形の出現率は相手場面で有意に高いのに対して、非デスマス形の出現率は第三者場面で有意に高いことが分かった。つまり、「初対面」の場合、CNSは、第三者場面の方が相手場面より非デスマス形へシフトする傾向が有意に強いと言えよう。

表3-2 残差の一覧表

	デスマス形	非デスマス形	中途終了型
相手場面	2.8**	-2.7**	-0.5n.s.
第三者場面	-2.8**	2.7**	0.5n.s.

(n.s. : not significant, **p<.01)

4.2 非デスマス形へのシフト要因の分析

では、これらのスピーチレベル・シフトは、どのような状況で、どのような要因によって生起するのだろうか。ここでは、「初対面」会話におけるCNSの非デスマス形へのシフトが生起する状況及びその要因につ

いて分析する。まず、4.2.1でシフトが起きた発話を発話機能によって分類した結果を報告する。次に、4.2.2でそれぞれの発話機能によるシフト要因について分析し、考察する。

4.2.1 発話機能による非デスマスへのシフトの分類

「初対面」の場合、CNSのデスマス形から非デスマス形へのシフトは、相手場面では271話であるのに対して、第三者場面では369話であった。本稿では、三牧（1993、2000）、宇佐美（1995）、陳（2003）が挙げた非デスマス形へシフトしやすい状況を参考にし、「初対面」会話におけるCNSの「非デスマス形」へのシフトを、a「情報の受信を示す時」、b「情報の整理を表す時」、c「感情の表出を行う時」、d「あいづちを打つ時」の4つに分類することにした。そのようにして分類した結果を表4-1に示す。

表4-1 両場面における「初対面」会話の非デスマス形へのシフト

	発話数 (%)				
	a 情報の受信	b 情報の整理	c 感情の表出	d あいづち	合計
相手場面	100 (36.9)	116 (42.8)	33 (12.2)	22 (8.1)	271 (100.0)
第三者場面	171 (46.3)	119 (32.2)	50 (13.6)	29 (7.9)	369 (100.0)
合計	271 (42.3)	235 (36.7)	83 (13.0)	51 (8.0)	640 (100.0)

$$(\chi^2(3) = 8.270, p < .05)$$

表4-1を見ると、相手場面と第三者場面におけるa「情報の受信を示す時」とb「情報の整理を表す時」の数値が逆転していることに気づく。この結果について χ^2 検定を行ったところ、5%水準で有意差があった($\chi^2(3) = 8.270, p < .05$)。さらに、表4-2に示した残差分析の結果、a「情報の受信を示す時」によるシフトの頻度は第三者場面で有意に高

いのにに対して、b「情報の整理を表す時」によるシフトの頻度は相手場面で有意に高いことが分かった。

表4-2 残差の一覧表

	a 情報の受信	b 情報の整理	c 感情の表示	d あいづち
相手場面	-2.4*	2.7**	-0.5n.s.	0.1n.s.
第三者場面	2.4*	-2.7**	0.5n.s.	-0.1n.s.

(n.s. : not significant, *p<.05, **p<.01)

4.2.2 発話機能による非デスマス形へのシフト要因

では、以上のような、両場面におけるシフト要因の頻度の違いは何を意味しているのだろうか。その要因を明らかにするために、以下、4.2.2.1～4.2.2.2でa「情報の受信を示す時」、b「情報の整理を表す時」談話の分析を質的に試みることにする。

4.2.2.1 情報の受信を示す時

まず、第三者場面で有意に高いa「情報の受信を示す時」の談話を観察する。

a「情報の受信を示す時」とは、話し手が聞き手からの情報を受信したことを示す状況である。三牧（1993、2000）、宇佐美（1995）、陳（2003）を参考にし、非デスマス形へシフトしやすい状況のa「情報の受信を示す時」を、①「相手の発話の一部を繰り返す時」、②「確認や確認のための質問をする時」、③「先取りをする時」、④「相手の発話に対する補足をする時」、⑤「相手の質問に応答する時」の5つに分類することにした。その結果が表5である。

表5 「情報の受信を示す時」の非デスマス形へのシフト

	発話数 (%)					
	①相手発話の繰り返し	②確認・質問	③先取り	④相手発話の補足	⑤質問の応答	合計
相手場面	38 (38.0)	27 (27.0)	12 (12.0)	8 (8.0)	15 (15.0)	100 (100.0)
第三者場面	53 (31.0)	32 (18.7)	26 (15.2)	17 (9.9)	43 (25.1)	171 (100.0)
合計	91 (33.6)	59 (21.8)	38 (14.0)	25 (9.2)	58 (21.4)	271 (100.0)

($\chi^2(4) = 6.668n.s.$)

「情報の受信」の下位分類に関して χ^2 検定を行ったところ、場面間で統計的な有意差はなかったが、質的に分析することで「情報の受信」の際に第三者場面でスピーチレベル・シフトの生起が多い理由に関する示唆が得られる可能性があるため、以下に各分類の談話を分析する。

①相手の発話の一部を繰り返す時

まず、①「相手の発話の一部を繰り返す時」の談話例を示す。

例1

249-1 KNS1: お母さん、母が言って、“そういうことがあって、ちょっとつらい、つらい思い、<思い出があった> <|” ,, (✓)

→251 CNS1: <つらい思い出、うん> <|>。 (N)

249-2 KNS1: って言うけど、私<笑いながら>よく、なんか…。(NM)

CNS1は251「つらい思い出、うん」で非デスマス形へシフトしている。これはCNS1が249-1のKNS1の発話「そういうことがあって、ちょっとつらい、つらい思い、思い出があった」の一部を繰り返した発話である。こうした相手の発話の一部の繰り返しによるシフトについて、陳(2003)は、話者間の距離感を縮小させ、話しやすい雰囲気醸成できると指摘

している。このような「相手の発話の一部を繰り返す時」に非デスマス形ヘシフトすることによって、CNS1は話者間の距離感を縮小させ、話しやすい雰囲気を醸成していると言えよう。

②確認や確認のための質問をする時

次に、②「確認や確認のための質問をする時」の談話例を示す。

例 2

361 KNS1：韓国では、普通（うん）1年生が終わったら、1年生は
終わって、軍隊に行く人が多いです。 (P)

→362 CNS1：男たち?? (N)

363 KNS1：男たちは、はい。 (P)

例 2 では、KNS1は、361で韓国の大学生（男性）は1年生が終わったら軍隊に行く人が多いことについて話しているが、軍隊に行く学生が男性であることについてははっきり述べていないため、CNS1は362で「男たち??」という、確認のための質問をして非デスマス形ヘシフトしている。宇佐美（1995）は、主要な話題の流れの途中で、その内容をよりよく理解するために確認したり確認のために質問したりする時に普通体を使用することによって、発話を簡潔化して、会話のスムーズな流れを滞らせるのを最小限にとどめることができると指摘している。つまり、主要な話題の流れの途中で何かを確認する時に、効率を求めて非デスマス形が用いられると考えられる。

③先取りをする時

続いて、③「先取りをする時」に非デスマス形ヘシフトする談話例を

示す。例3では、KNS1は韓国で恋愛のカップルが徴兵制のせいで最後に別れる人が多いことについて話している。

例3

391 KNS1 : <そういうこともあるし、男> |>|, 男の子で (はい),
もうなんか、女の人が2年間待ってくれたけど、男の人が
また 【】。 (NM)

→392 CNS1 : 【】 ああ、心なんか、気持ちもう変わった<みたい> |<|。
(N)

393 KNS1 : <うん、変わった> |>| みたいな、そういう感じで、別れ
る人もいと聞きました。 (P)

KNS1が391で「そういうこともあるし、男、男の子で、もうなんか、女の人が2年間待ってくれたけど、男の人がまた」と話し出すと、CNS1はKNS1の言おうとしたことを予測し、KNS1の発話のターンの終了を待たずに、392で「ああ、心なんか、気持ちもう変わったみたい」と非デスマス形の発話によって先取りして、KNS1の発話を完成させている。「先取り」の言語行動については、林(2008)が、会話における熱心さを伝え、会話相手との協力や連帯感を強めるという肯定的な側面があると論じている。これに従えば、先取りをする時に、非デスマス形へシフトすることによって、話者間の心理的距離が短縮できると思われる。

④相手の発話に対する補足をする時

次に、④「相手の発話に対する補足をする時」の談話例を示す。例4は、日本人の行列に並ぶ文化に関する談話である。

例 4

160-2 GNS2：もう前から前の人が先に外出して（うん）、それで順番
にみんなちゃんと待ってた、それはすごいな—と思った。
(N)

162 GNS2：<誰も>{|<| 【。

→163 CNS9：】 <秩序>{|>| がいい。
(N)
(中略)

166 GNS2：うん、バス停とかでもちゃんと列になって（うん）並
ぶとか、それもドイツではないね、バス停では列に並
ばない。
(N)

→167 CNS9：で、あと電車もそう。
(N)

GNS2は、160-2で自分が乗った飛行機が日本に到着した時、日本人が並んで順番待ちをして飛行機を降りることを話している。その発話に対して、CNS9は163で「秩序がいい」と評価を補足する時に非デスマス形へシフトしている。続いて、166GNS2の「日本人がバス停でもちゃんと列に並ぶ」という発話に対して、CNS9は167で「で、あと電車もそう」と補足する時に、再び非デスマス形へシフトしている。④「相手の発話に対する補足をする時」の発話は、会話相手、すなわち、聞き手領域に関わるものであり、この状況で非デスマス形へシフトすることによって、CNS9は、相手に共感を示そうとして積極的に相手の発話に関与し、相手との心的距離の短縮を図っていると考えられる。

⑤相手の質問に応答する時

最後に、⑤「相手の質問に応答する時」の談話例を示す。

例5

298 GNS1: でもたまには「あーもう中国帰りたーい」とか思う? (N)

299 CNS8: 思、思います。 (P)

300 GNS1: うーん、それは何が理由、理由は? (NM)

→301 CNS8: 理由はそうですね、例えば落ち込んだりとか (あー)、あ
のーなんだ、さみしい時とか、あのー助けてほしい時は
助けてくれる人もいないしとか (うーん)、そういう時
はなんだろう、すっごく (うーん) 国に帰りたいなあと
思ってる。 (N)

CNS8は、GNS1による298、300の「たまに中国へ帰りたと思う理由は何か?」という質問に回答する時に、301で非デスマス形へシフトしている。その中の「そうですね」、「あー」、「なんだ」、「なんだろう」というフィラー⁴の使用から、CNS8が考えながら回答する様子が窺える。これは、CNS8が情報伝達に意識が集中していることを示している。

以上のことから、①②③④は、いずれも、会話の相手である聞き手に関わる発話、すなわち「聞き手領域」に関わる発話と考えられる。⑤は聞き手の情報要求に応じる発話である。「初対面」の場合、①②③④⑤のようなa「情報の受信を示す時」は、第三者場面で有意に多かったことから、CNSは、第三者場面においては「聞き手領域」に関わる発話や「聞き手の情報要求に応じる」発話が非デスマス形へシフトしやすいことが分かる。

4 「フィラー」とは、「発話の一部分を埋める音声現象や語句のことを指し、それ自身は命題内容、及び、他の発話との（狭義の）応答関係・接続関係・修飾関係を持たない」（林2008：p.131）。

4.2.2.2 情報の整理を表す時

次に、相手場面で有意に高いb「情報の整理を表す時」の発話について観察する。

b「情報の整理を表す時」とは、話者が伝える情報を整理していることを示す状況である。三牧（1993、2000）、宇佐美（1995）、陳（2003）を参考にし、非デスマス形へシフトしやすい状況のb「情報の整理を表す時」を、⑥「自己発話に対する補足をする時」、⑦「重要部分の明示、強調をする時」、⑧「独話的発話をする時」、⑨「新しい話題へ移行する時」の4つに分類することにした。その結果が表6である。

表6 「情報の整理を表す時」の非デスマス形へのシフト

	発話数 (%)				
	⑥自己発話の補足	⑦重要部分の明示・強調	⑧独話	⑨新話題への移行	合計
相手場面	49 (42.2)	51 (44.0)	8 (6.9)	8 (6.9)	116 (100.0)
第三者場面	40 (33.6)	55 (46.2)	10 (8.4)	14 (11.8)	119 (100.0)
合計	89 (37.9)	106 (45.1)	18 (7.7)	22 (9.4)	235 (100.0)

($\chi^2(3) = 2.882n.s.$)

「情報の整理」の下位分類に関して χ^2 検定を行ったところ、場面間で統計的な有意差はなかったが、質的に分析することで「情報の整理」の際に相手場面でスピーチレベル・シフトの生起が多い理由に関する示唆が得られる可能性があるため、以下に各分類の談話を分析する。

⑥自己発話に対する補足をする時

まず、⑥「自己発話に対する補足をする時」の談話例を示す。

例6

152 CNS4：で、だからもうすごく自分は心がね、なんか年取ってる
(えー！?あー) 年寄りの心持ってる、そういうふう
に思っちゃうなん<ですよ> <|>。(P)

153 JNS4：<はいはい> <|>はいはい<はいはい> <|>。(P)

→154 CNS4：<大体> <|>の20代の若者みんななんか週末とか遊ぶと
か部活とか(はいはい)、でも私、昨日ね、クリスマスイ
ブなんだけど、1人で寝てる(あー)、1人で一日中家で
食べて寝てる(はいはい)、で起きて(あーあー)寝てる、
そういう感じ。(N)

CNS4は152で自分は若いのに年寄りの心を持っていることを話している。この発話に続いて、CNS4は154で「20代の若者は週末は部活をしたり遊んだりして元気に過ごしているが、自分はクリスマスイブの時でも一日中家で1人で食べたり寝たりしている」と具体的な内容を補足する時に、非デスマス形へシフトしている。三牧(1993)によると、このような非デスマス形へのシフトは、「自己発話に対する補足」を示す談話展開標識の機能を果たしているという。つまり、⑥「自己発話に対する補足」は、「話し手領域」の発話であることを示すために非デスマス形が使われていると言える。

⑦重要部分の明示、強調をする時

次に、⑦「重要部分の明示、強調をする時」の談話例を示す。

例 7

192 CNS5：うーん、私の故郷は中国の湖南省知っていますか？あの
湖南省、南<の方です> {< }。 (P)

(中略)

198 CNS5：あのう、私の故郷は辛いのが一番好きなところです。(P)

→199 CNS5：中国で一番辛いとも言われている。(N)

例 7 では、CNS5 は故郷の湖南省の話題を取り上げて、198 で「あのう、私の故郷は辛いのが一番好きなところです」と話している。続いて、199 で「中国で一番辛いとも言われている」という重要部分を強調する時に、非デスマス形へシフトしている。三牧 (1993) は、このような重要部分の明示・強調によるシフトを、やはり談話展開標識の機能として指摘しており、CNS5 は、「中国で一番辛いところ」という重要部分を非デスマス形へシフトさせることによって、明示していると考えられる。

⑧独話的発話をする時

続いて、⑧「独話的発話をする時」の談話例を示す。

例 8

279-1 JNS2：やっぱ日本人でもそんなに,, (/)

280 CNS2：あ、<そんなに行かない> {< }。 (N)

279-2 JNS2：<あんま行かない> {> }。 (N)

281 CNS2：はい。 (P)

→282 CNS2：[小さな声で] 行かないなあ。(N)

283 JNS2：うん。 (N)

CNS2は282で小さな声で「行かないなあ」と独話的発話をする時に、281のデスマス形から非デスマス形へシフトしている。三牧（1993）は、独話的発話をする時に非デスマス形へシフトすることによって、当該の発話が話し手自身に向けられていることを明示する談話展開標識の機能を果たしていると指摘している。つまり、CNSは、自分自身に向けた独話の場合に非デスマス形へシフトしていると言える。

⑨新しい話題へ移行する時

最後に、⑨「新しい話題へ移行する時」に非デスマス形へシフトする談話例を示す。

例9

- 343 JNS2：日本の男性はどうですか？中国の男性と比べて。 (P)
- 344 CNS2：やっぱ顔が違い<ます>|<|。 (P)
- 345 JNS2：<あー>|>|。 (✓)
- 346 CNS2：でも、こっちもイケメンもけっこういると思います。 (P)
- 347 JNS2：イケメンはイケメンですけど。 (P)
- 348 CNS2：私は中国にいるときは、所属の〇〇大学、大体女の子のほうが圧倒的に多い。 (N)
- 349 JNS2：あ、そうなんですか。 (P)
- 350-1 CNS2：はい、たぶんまあ10の中で7人ぐらいは、 (✓)
- 351 JNS2：そんなに<多いんだ>|<|。 (N)
- 350-2 CNS2：<女の>|>|子で。 (NM)

例9は347までは「日本の男性」についての発話であるが、CNS2は348で「私は中国にいるときは、所属の〇〇大学、大体女の子のほうが圧倒的に多い」と非デスマス形で「所属大学は女子学生が多い」という新しい話題を導入している。このように、話題が「日本の男性」から「CNS2の所属大学の女子学生の人数」へ、すなわち「話し手領域」へ転換されている。この状況で非デスマス形へシフトすることによって、新しい話題の開始が明確に示されている。

以上のことから、⑥⑦⑧⑨は、いずれも三牧（1993）が指摘する談話展開標識を示すシフトと言え、特に⑥⑦⑨は、話し手自身に関わる内容、すなわち「話し手領域」に関する発話であり、⑧は、独話的発話、すなわち「話し手自身へ向けられた」発話である。⑥⑦⑧⑨のようなb「情報の整理を表す時」は、相手場面で有意に多かったことから、「初対面」の場合、相手が日本語母語話者である相手場面では、CNSは、「話し手領域」の内容や「話し手自身へ向けられた」発話によって「情報の整理を表す時」に非デスマス形へシフトする傾向があると言える。

5. まとめと今後の課題

以上、相手場面と第三者場面において、CNSのスピーチレベル管理は、初対面の相手に対して、それぞれどのような選択基準によってなされるか、分析した。その結果、以下のことが明らかになった。

まず、CNSは、基本的スピーチレベルの設定にあたり、「初対面」会話においては、相手が日本語母語話者か非母語話者かにかかわらず、相手場面と第三者場面のどちらにおいても、日本語の規範に従い、「疎」の社会的関係を考慮し、デスマス形を基調として選択している。

一方、CNSのスピーチレベル・シフトには相手が日本語母語話者か非

母語話者かによって差が見られた。「初対面」会話では、第三者場面の方が相手場面より非デスマス形へシフトする傾向が強く、同じ「初対面の相手」であっても、相手が非母語話者である場合には丁寧であろうとするCNSの意識が下がることが推測された。さらに、非デスマス形へのシフトの状況を発話機能によって分類して分析し、次の結果が得られた。CNSは、第三者場面においては「聞き手領域」に関わる発話や「聞き手の情報要求に応じる発話」が非デスマス形へシフトしやすいのに対して、相手場面においては「話し手領域」に関わる発話や「話し手自身に向けられた」発話が非デスマス形へシフトする傾向がある。これらのことから、CNSは、非母語話者には「心的距離の短縮」と「情報伝達」を優先するのに対して、母語話者には、待遇的意味に配慮して母語話者に「へりくだる姿勢」を見せる可能性が示唆される。以上の結果から、CNSは「疎」という相手との人間関係に応じたスピーチレベルの使い分けはできているものの、CNSのスピーチレベル・シフトには、言語外的要因として、相手が日本語母語話者である場合には待遇的意味に強く配慮してより丁寧であろうとする「学習者独自のルール」が存在することが指摘されるだろう。伊集院（2004）には、母語話者が母語場面と相手場面とで異なるスピーチレベル・シフトを行っているとの指摘があるが、本調査では、非母語話者も、異なる母語をもつ同士による第三者場面において、相手場面とは異なる言語規範意識によってスピーチレベルを管理していることが明らかにされた。

今回は、女性同士による「初対面」会話をデータとしており、男性同士の場合など性別による他の条件の時に、第三者場面におけるスピーチレベル管理がどう変化するかも興味深い点である。これについては、今後の課題としたい。

付記

本稿は、2019年に文教大学大学院言語文化研究科に提出した博士論文『接触場面における日本語非母語話者の言語調節に関する研究—相手言語接触場面と第三者言語接触場面の比較—』の一部を加筆修正したものである。

<参考文献>

- 赤羽優子（2014）「日本語非母語話者の日本語接触場面における心理面の調節」『計量国語学』29（5），pp.131-153
- 伊集院郁子（2004）「母語話者による場面に応じたスピーチ文末スタイルの使い分け—母語場面と接触場面の相違—」『社会言語科学』6（2），社会言語科学会，pp.12-26
- 上仲淳（1997）「中上級日本語学習者の選択するスピーチレベルおよびスピーチレベルシフト—日本語母語話者との比較—」小出詞子先生退職記念編集委員会編『日本語教育論文集—小出詞子先生退職記念—』凡人社，pp.149-165
- 上仲淳（2005）「日本語非母語話者に特有のスピーチレベルのシフト要因—中国語を母語とする上級日本語学習者の接触場面から—」『社会言語科学会第16回大会発表論文集』，社会言語科学会，pp.160-163
- 宇佐美まゆみ（1995）「談話レベルから見た敬語使用—スピーチレベルシフト生起の条件と機能—」『学苑』662，昭和女子大学近代文学研究所，pp.27-42
- 宇佐美まゆみ（2006）「改訂版:基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese : BTSJ）2005年2月25日改訂版」『自然会話分析への言語社会心理学的アプローチ』言語情報学研究報告13，東京外国語大学大学院地域文化研究科21世紀COEプログラム「言

- 語運用を基盤とする言語情報学拠点」, pp.21-46
- 川口良 (2015) 「日・中・韓接触場面における討論の分析—談話における「逸脱」に注目して—」『文学部紀要』29 (1), 文教大学文学部, pp.1-36
- 篠崎佳恵 (2012) 「初対面二者間会話におけるスピーチレベルの変遷とその要因—普通体の指標的意味に着目して—」『桜美林言語教育論叢』8, 桜美林大学言語教育研究所, pp.15-28
- 高橋美奈子・谷部弘子・本田明子 (2017) 「第三者言語接触場面におけるスピーチレベルシフトの機能—日本語学習者同士の自然談話の分析から—」『ことば』38, 現代日本語研究会, pp.46-62
- 陳新 (2019a) 「中国人上級学習者の相手言語接触場面と第三者言語接触場面におけるスピーチレベル管理について」『言語文化研究科紀要』5, 文教大学大学院言語文化研究科, pp.33-58
- 陳新 (2019b) 「接触場面における日本語非母語話者の言語調節に関する研究—相手言語接触場面と第三者言語接触場面の比較—」2019年度博士論文, 文教大学大学院言語文化研究科
- 陳新・川口良 (2012) 「中国語を母語とする日本語上級学習者の文末スタイルシフトに関する一考察」『言語と文化』25, 文教大学, pp.70-100
- 陳文敏 (2003) 「同年代の初対面同士による会話に見られる「ダ体発話」へのシフト—生起しやすい状況とその頻度をめぐって—」『日本語科学』14, 国立国語研究所, pp.7-28
- 陳文敏 (2004) 「台湾人上級日本語学習者の初対面接触場面会話におけるスピーチレベル・シフト—日本語母語話者同士による会話との比較—」『日本語教育論集』20, 国立国語研究所, pp.18-33
- 日本語記述文法研究会編 (2009) 『現代日本語文法7 談話／待遇表現』

くろしお出版

- 林宅男（2008）『談話分析のアプローチ：理論と実践』研究社
- ファン, S. K. (2006) 「接触場面のタイポロジーと接触場面研究の課題」
『日本語教育の新たな文脈—学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性—』独立行政法人国立国語研究所編, 株式会社アルク, pp.120-137
- ボイクマン 総子・森一将（2018）「基調スピーチレベルの選択とスピーチレベル・シフトの発達—中級日本語学習者と上級日本語学習者の比較—」『問谷論集』12, 日本語日本文化教育研究会編集委員会編, pp.1-25
- 三牧陽子（1993）「談話の展開としての待遇レベル・シフト」『大阪教育大学紀要 第1部門』42（1）, 大阪教育大学, pp.39-51
- 三牧陽子（2000）「丁寧体基調の談話にみる独話的発話・直接引用・心情の直接表出—「働きかけ方式」のポライトネス・ストラテジーとして—」『大阪大学留学生センター研究論集多文化社会と留学生交流』4, 大阪大学留学生センター, pp.37-53
- 三牧陽子（2013）『ポライトネスの談話分析—初対面コミュニケーションの姿としくみ—』くろしお出版

